

『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 おおひら よしこ

【作品 1】



『inner voice』

2002年 新制作展初出品 初入選作品

私が独学でフェルトを作り始めてから 20 年余り過ぎていました。フワフワした羊毛が自分の手で強靱なものになるのは不思議で楽しい。身につけて使えるフェルトを作っていました。フェルトは紀元前から作られていたし、人間と羊は深く関わってきた歴史があります。フェルトの作り方は原始的な方法で、今も変わらない。羊毛という素材を生かして自然から感じたことを表現したいと思っています。羊毛の上に、絹・麻・綿など異素材をのせてフェルトにしました。其々の個性を際立たせるように羊毛の表面に出した作品です。ノマドなフェルトとは異なる、現代に生きていくフェルトを表現していきたいと思って制作しました。

【作品 2】



『Noa』

2016年 新制作展 第80回記念賞受賞作品

羊毛を重ねて少量の水分を加えて羊毛を摩擦することで、羊毛が絡み合っフェルトになります。布に羊毛をフェルトにすると、接着の効果が出せます。十分にフェルトになると着彩も上下の色が混ざり合い絵の具を重ねたような効果が出来ます。アイデアを実験していく中で出来た作品です。ノアの方舟に羊が乗っていたことに感謝して作りました。

【作品 3】



『絡合 entanglement』

2021 年、コロナ禍が世界中の人々を恐怖に陥れました。人と会えない日々の中で、作品を通して現在出来ることは何か、伝えなければいけないことは何でしょう。すべてのことが関連している。宇宙にある全てのものは、絡み合う力を使って生命を繋げていくはず、そのような思いを表現しました。

羊と人間の関わりは紀元前からです。羊やフェルトが出てくる歴史上の話は大変興味深いものが沢山あります。これからの地球、世界で、持続可能な素材としての羊毛は有るのか。もう既にウール 100% のセーターは高価なものとなり、市場から消えつつあります。荒れ狂う地球環境の中で示されていることを感じて、何をすべきかを考えなければいけないと思います。羊毛文化のフェルト、じゅうたん、衣服を残していくために。



北海道で生まれる

1989年 北海道芸術の森クラフト展

1990年 工芸都市高岡クラフト展
東京デイリーアートコンペ展

1992年 伊丹クラフト展
北海道芸術の森クラフト展

1996年 トルコでフェルト作りを学ぶ

1997年 丸善 HAT・HAT・HAT 展

1998年 丸善 HAT・HAT・HAT 展

1999年 インターナショナルフェルトシンポジウム出席
(フィンランド)

2000年 パキスタン・アフガニスタン国境地帯を旅する
ギャラリーテン2人展

2001年 インターナショナルフェルトシンポジウム出席
(キルギス)

中央アジア、フェルトと羊をめぐる旅をする
(ウズベキスタン、トルコ)

ギャラリー西利 (京都) 個展

東京ワークハンド 2002

新制作展初入選

2005年 ギャラリーゼフィール個展

2006年 東京メトロポリタンアート展
新制作展 第80回記念賞受賞